５.長岡京跡右京第998次（7ANNKN-7地区）・友岡遺跡発掘調査報告

１．はじめに

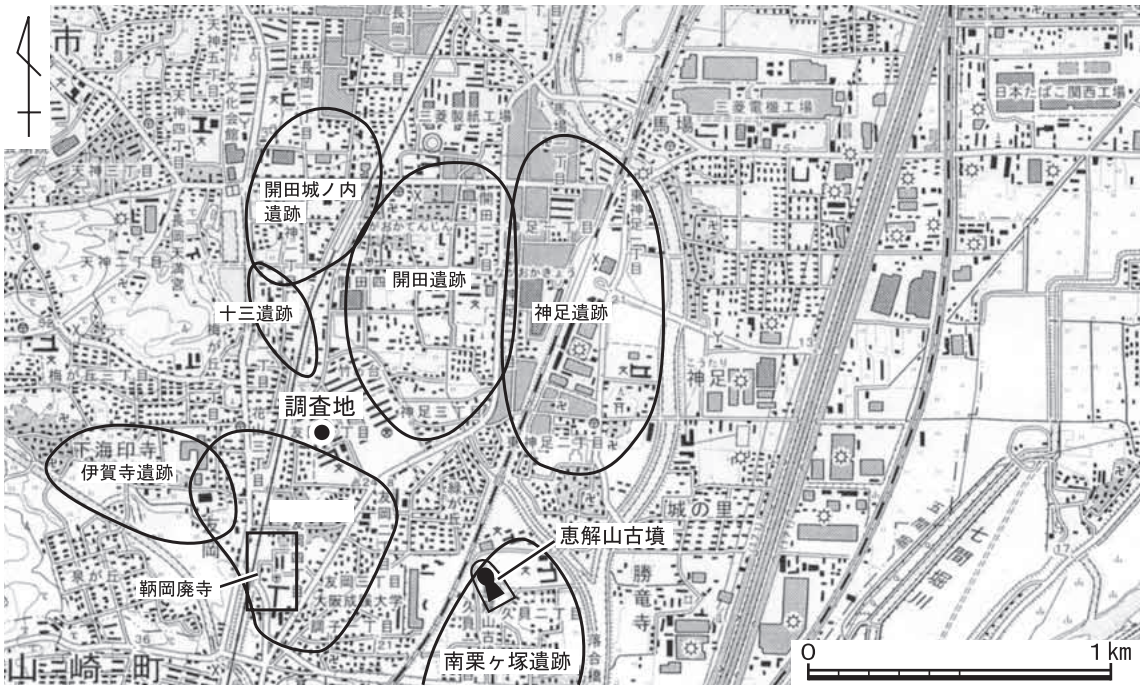
今回の調査は、独立行政法人雇用・能力開発機構の依頼を受けて、同京都センター研修棟の建て替え工事に伴い実施したものである。

調査対象地は、長岡京市友岡１丁目２番１号に所在し、長岡京条坊復原図によれば、右京七条三坊二町にあたり、東側に西二坊大路が想定される位置にあたる。また、遺跡地図では、縄文時代から中世にかけての遺跡である友岡遺跡に隣接し、友岡遺跡の北東に接する位置にあたる。

周辺の調査としては、独立行政法人雇用・能力開発機構京都センターの敷地内の西隣（現在の多目的ホール）の建設時に長岡京跡右京第363次調査、その南側のマンション建設に伴い右京第294次調査が実施されている。

調査は平成22年５月22日に着手し、調査期間中の８月27日に関係者説明会を行い、独立行政法人雇用・能力開発機構京都センター職員等約60人と長岡京市教育委員会、（財）長岡京市埋蔵文化財センターから参加があった。９月10日に現地調査をすべて終了した。

現地調査および整理作業にあたっては、多くの方々の参加を得た。また、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、（財）長岡京市埋蔵文化財センターをはじめ多くの方々にご指導、ご協力をいただいた。厚くお礼申し上げます。



第１図　調査地位置図及び周辺遺跡分布図（国土地理院 京都西南部 １/25,000）

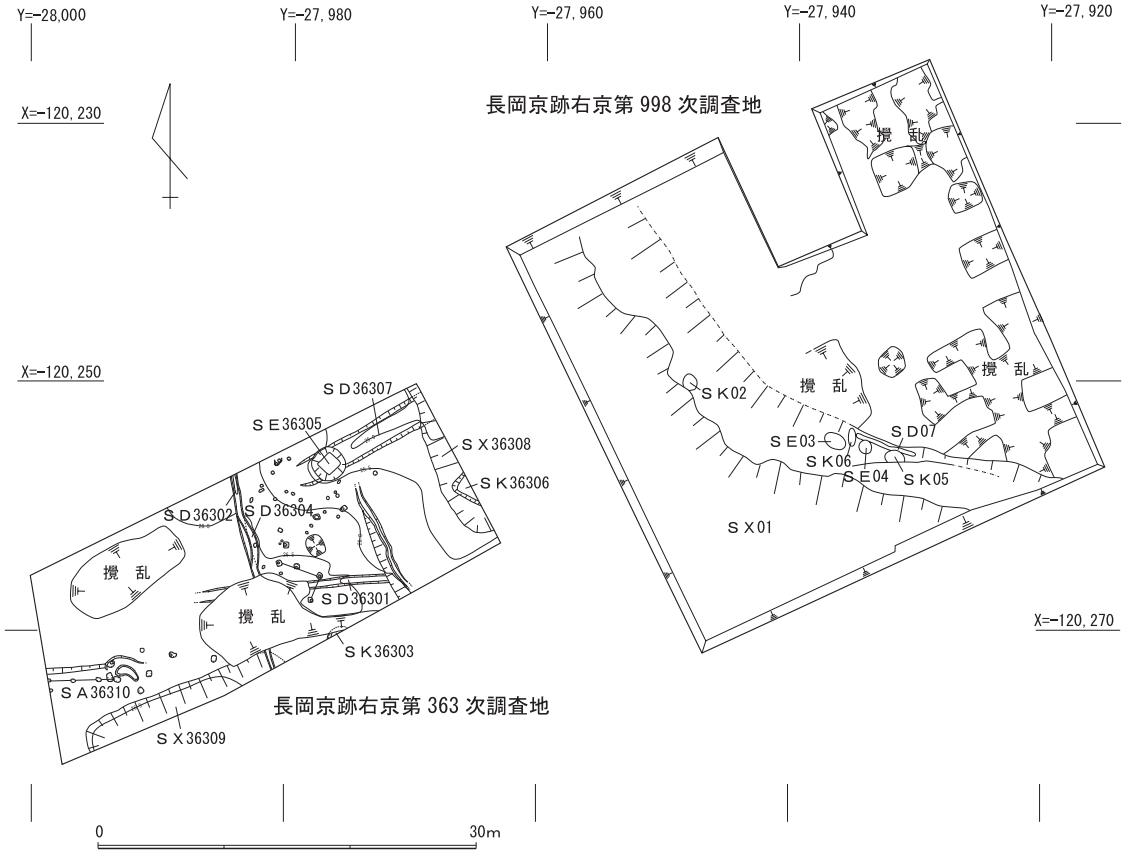
この調査報告は次席総括調査員田代弘と専門調査員石尾政信が執筆した。

発掘調査にかかる費用は、全額、独立行政法人雇用・能力開発機構が負担した。

現地調査責任者	調査第２課長　肥後弘幸
調 査 担 当 者	調査第２課主幹調査第３係長事務取扱　石井清司
	同　次席総括調査員　田代弘
	同　専門調査員　石尾政信
調 査 場 所	長岡京市友岡１丁目２番１号
現地調査期間	平成22年５月22日～９月10日
調 査 面 積	1,200㎡

２．位置と環境

調査対象地は阪急電車長岡天神駅から南へ600mの地点で、長岡天神の西裏から南東方向に延びる丘陵の北東端に位置している。調査地北西部の現在の標高は26.7m前後である。調査対象地の東側は戦前に造られた旧長岡競馬場によって大きく地形が改造されており、その跡地に団地と京都府立乙訓高等学校が造られている。旧競馬場と今回の調査地とは５m前後の比高差がある。独立行政法人雇用・能力開発機構の前身である雇用促進事業団の研修施設を開設したときにも、造成が行われたといわれている。独立行政法人雇用・能力開発機構京都センター敷地の北西で、



第２図　周辺調査地及び今回調査地平面図

阪急電鉄京都線との間に旧地形をうかがわせる約２ｍの高まりが残存している。また、独立行政法人雇用・能力開発機構京都センター敷地の南東には、長岡京市立第四小学校との間に幅約20ｍの窪地が認められ、旧地形の痕跡と推定される。

調査対象地の南西には縄文時代～近世の複合遺跡である友岡遺跡がひろがり、その南端付近に奈良時代の瓦が出土する鞆岡廃寺がある。北側の丘陵裾の平地に旧石器時代の石器や縄文時代中期～晩期の土器が出土する十三遺跡がある。その北に旧石器、縄文時代後・晩期、弥生時代～近世の複合遺跡である開田城ノ内遺跡がある。北東側の平地(旧長岡競馬場東部を含む)には、縄文～近世の遺構が検出されている開田遺跡がある。その東側に縄文～近世の各時代の遺構が検出されている神足遺跡がひろがっている。友岡遺跡の西側には縄文時代～中世にかけての複合遺跡である伊賀寺遺跡がある。友岡遺跡の南東には国指定史跡である全長120ｍの恵解山古墳があり、旧石器、縄文後・晩期、弥生時代～近世の複合遺跡である南栗ヶ塚遺跡がある。

周辺では長岡京跡右京第363次調査と右京第294次調査がある。右京第363次調査では奈良時代の土器が出土した溝と、中世の溝・柵列・流路状の落ち込み(ＳＫ36308)、時期不明の井戸などが検出されている。右京第294次調査では、中世の柱列・土坑・溝などが検出されている。両者とも長岡京期の遺構は検出されていない。右京第363次調査地はベース面が緩やかに東に傾斜する地形となっている。

３．調査概要

調査地は研修棟跡地のため、建物基礎などにより撹乱され遺構の残存状況が危ぶまれた。調査予定地内で掘削排土置き場を確保するため、東西に分割して調査を行った。西側では撹乱・現代整地層の下に中・近世の包含層が認められた。南西端で暗灰色粘質土・黒灰色粘質土などが厚く堆積していた。その下に茶褐色系の砂礫層がみられた。暗灰色粘質土・黒灰色粘質土から長岡京期～中世の土器などが出土したので、この遺物包含層を追いかけてそれより上層を重機により掘削したところ、本来の地山(ベース面)である砂礫層・粘質土を掘削した場所ができた。暗灰色粘質土・黒灰色粘質土から縄文時代の石鏃をはじめ、中世までの各種の土器、自然木や鉱滓・炉壁などが多数出土した。粘質土の堆積状況から、現在の地表面に現れない谷状地形が埋没する過程で遺物が堆積したものと判断し、この谷状地形の湿地状堆積層を掘り進めた。土器類は谷状地形全体から出土するが、鉱滓・炉壁は谷状地形の中央部より南側から出土する傾向であった。西側北半分の掘削が終了した後、調査地の南東部～東部へと重機掘削を行い、掘削排土を調査終了地点に移動した。東側は南部で南西に落ち込む谷状地形を検出したが、それ以外は砂礫層・粘質土のベース面に建物基礎跡が残存するだけであった。周辺に存在したであろう遺構は削られて消滅したものと推測される。その後、谷状地形の堆積層などを人力で掘削した。西側南部からは各種の土器類、中世の輸入銭や田下駄などが出土した。東側南部の谷状地形の落ち込み上層で中世の遺物が下層では長岡京期～中世の遺物が出土した。長岡京期～中世の遺物とともに鉱滓・炉壁も出土している。

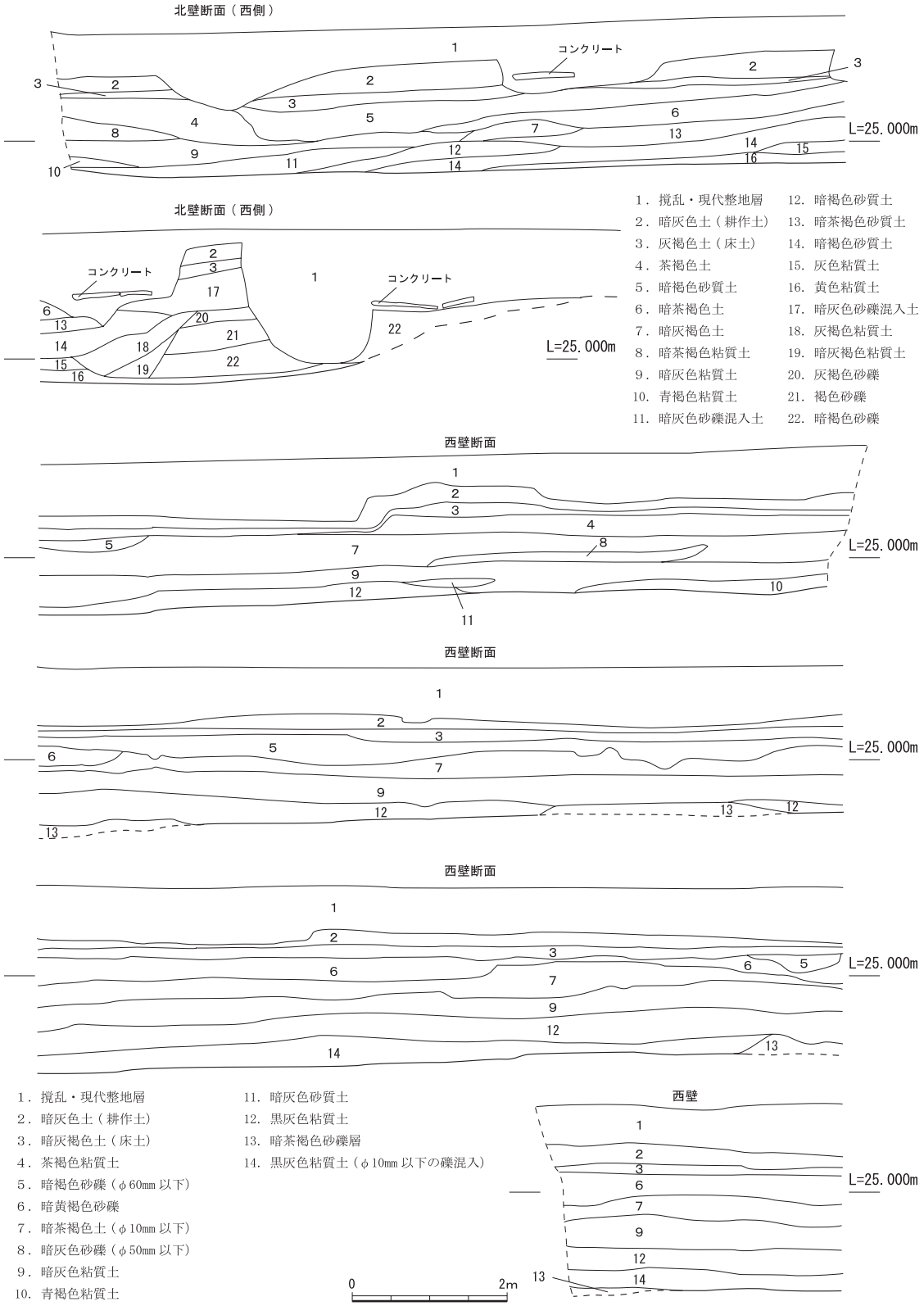
第３図　調査地平面図

調査地西側の基本層序は、撹乱・現代整地層の下に旧耕作土・床土が認められ、その下に暗褐色・暗黄褐色の土石流による砂礫層が堆積し、それより下に暗茶褐色土、暗灰色・黒灰色粘質土が堆積する。粘質土の下層に茶褐色砂礫層があり、南部の砂礫層に人頭大の石が認められた。暗灰色・黒灰色粘質土は湿地状堆積を反映したものと推測され、北西端では0.4m、南西部で約１mと厚く堆積していた。東側南部は撹乱・現代整地層の下に旧耕作土・床土が認められず、明褐色砂質土･淡青灰色土の下に淡黄褐色土(砂礫混入)･淡灰褐色土(砂礫混入)･灰褐色土(砂礫混入)･暗灰褐色土(砂礫混入)が堆積していた。

調査地の西・南半で湿地状堆積(ＳＸ01)を検出し、これに接して土坑(ＳＫ02・05・06)、井戸(ＳＥ03･04)、溝(ＳＤ07)などを検出した。ただし、谷状地形の東半では狭い平坦地が認められ、井戸(ＳＥ04)、土坑(ＳＫ05・06)、溝(ＳＤ07)はこの平坦面上で検出した。

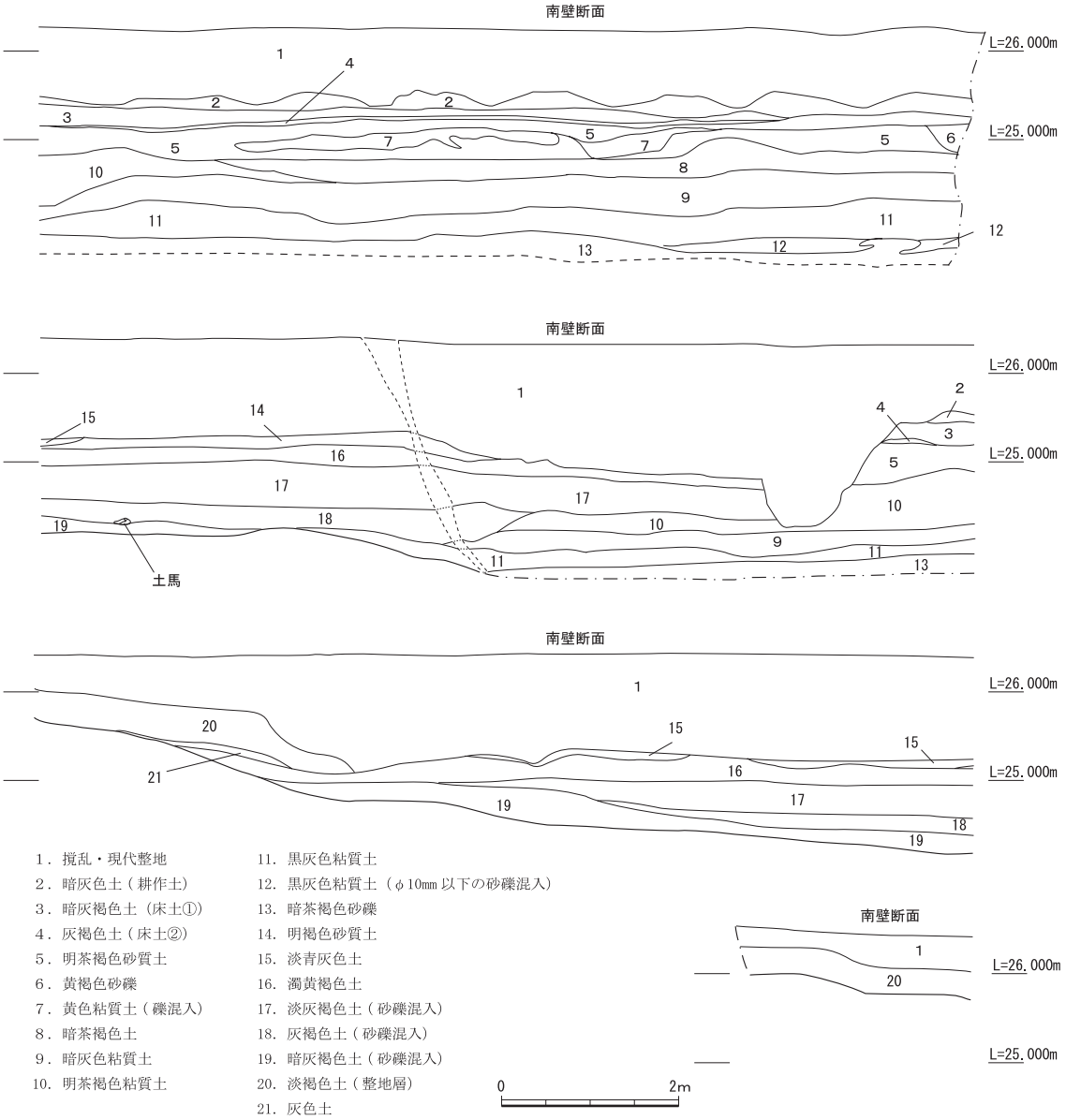
４．検出遺構

湿地状堆積ＳＸ01　トレンチの西側を北西から南東方向に傾斜する埋没した谷状地形に暗茶褐色土・暗灰色粘質土・黒灰色粘質土などが厚く堆積していた。長岡京跡右京第363次調査で検



第４図　調査地北・西壁土層断面図

出された落ち込み（ＳＸ36308）を谷状地形の西側とすると、中央部で東西幅25m前後と推定される。南西端で暗灰色･黒灰色粘質土が約1.0m堆積している。暗茶褐色土まで含めると約1.5mある。黒灰色粘質土の下に砂礫層があり、南部で人頭大の石が多数認められ、一部では長径70cm、短

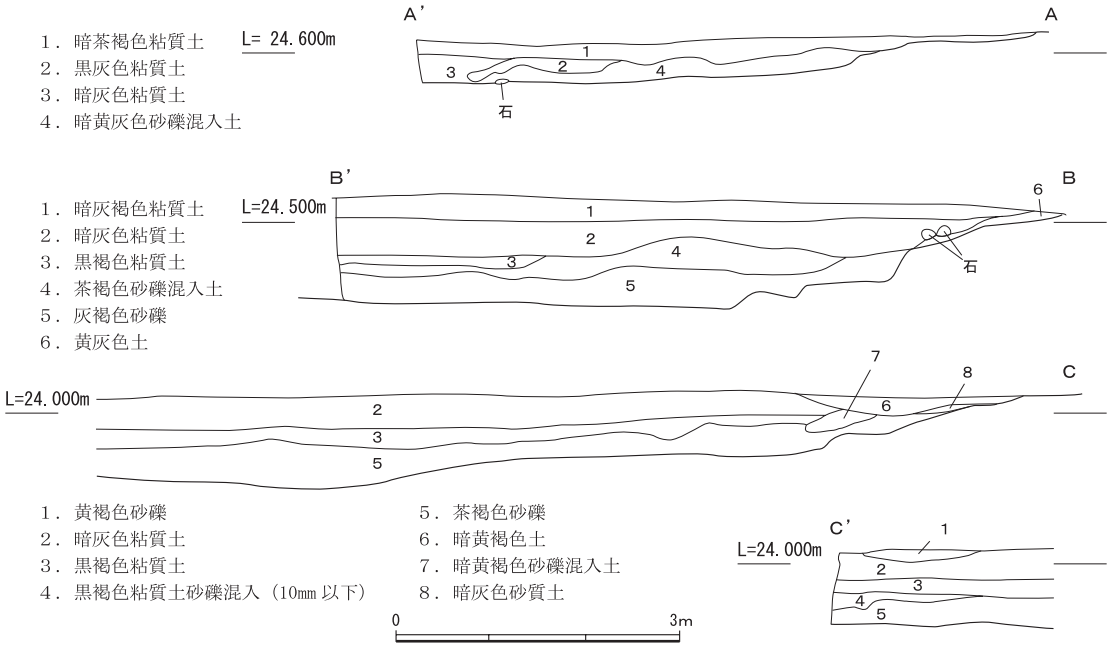


第５図　調査地南壁土層断面図

径40cmの石があった。これらのことから過去に強い流水があったことがわかる。何らかの原因（人為的か自然的かは不明）で堰き止められ湿地化したものと推測される。暗灰色粘質土・黒灰色粘質土から多量の遺物が出土した。鉱滓・炉壁類は、北部ではほとんど出土しておらず、中央部より南で多数出土している。

土坑ＳＫ02　ＳＸ01に接して検出した。長径1.5m、短径1.2mで、深さ0.2mの円形土坑である。瓦器・土師器の小破片が出土した。12世紀以降の埋没と推定される。本来は検出面より上面から掘り込まれていたものであろう。

井戸ＳＥ03　ＳＸ01の東側で検出した。長径1.5m、短径1.8mを測る円形の素掘り井戸である。検出面から約１m掘り下げた段階で、側面の崩落が著しくなったので途中までの掘削に留めた。埋め土に10～20cmの石が多量に詰まり、少量の近世以降の土器が含まれていたことから、江戸時代以降のものと思われる。



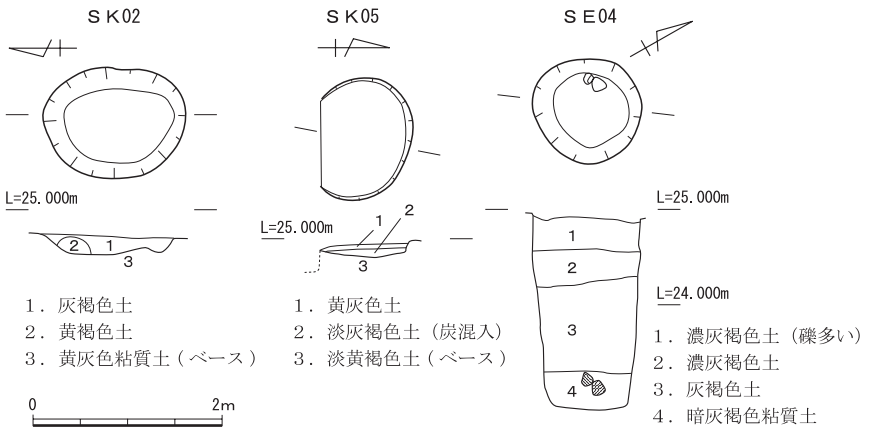
第６図　湿地状堆積ＳＸ01土層断面図

井戸ＳＥ04　南東部落ち込みの北側斜面の平坦部で検出した。直径1.15m前後の円形の素掘り井戸である。深さ2.1mで底面付近に20cm前後の石４個が存在したが、井戸枠はなかった。埋土の１層は濃灰褐色土で拳大の石が多量に混入していた。２層も濃灰褐色土で少量の石が混入していた。埋土上層から18世紀代の土器片が出土したことから江戸時代中期以降の埋没と推定される。

土坑ＳＫ05　井戸ＳＥ04の東側で検出した。南側が削られているが、直径1.2m前後の円形土坑である。深さ15cmを測る。埋土は黄灰色土と炭が混じる淡灰褐色土である。瓦器・土師器の小破片が出土したことから12世紀以降の埋没と推定される。

土坑ＳＫ06　ＳＥ04の北西で検出した。長径1.4m、短径0.6mを測る楕円形の土坑である。深さ15cmを測り、淡灰褐色土の埋土から土師器の小破片が出土しているので、中世以降の埋没と推定される。

溝ＳＤ07　南東部落ち込みの北側斜面の平坦部分との境界で検出した素掘り溝である。幅約40cmで、長さ4.7mにわたって検出したが両端は浅くなり途切れている。土坑ＳＫ05に接し、井戸ＳＥ04に切られている。深さ７cmで、灰褐色土の埋土から瓦器・土師器の小破片が出土したことから12世紀以降の埋没と推



第７図　土坑ＳＫ02・06、井戸ＳＥ04実測図

定される。傾斜面と平坦部の境界にあることから排水の機能を備えたものであろう。

５．出土遺物（第８～12図）

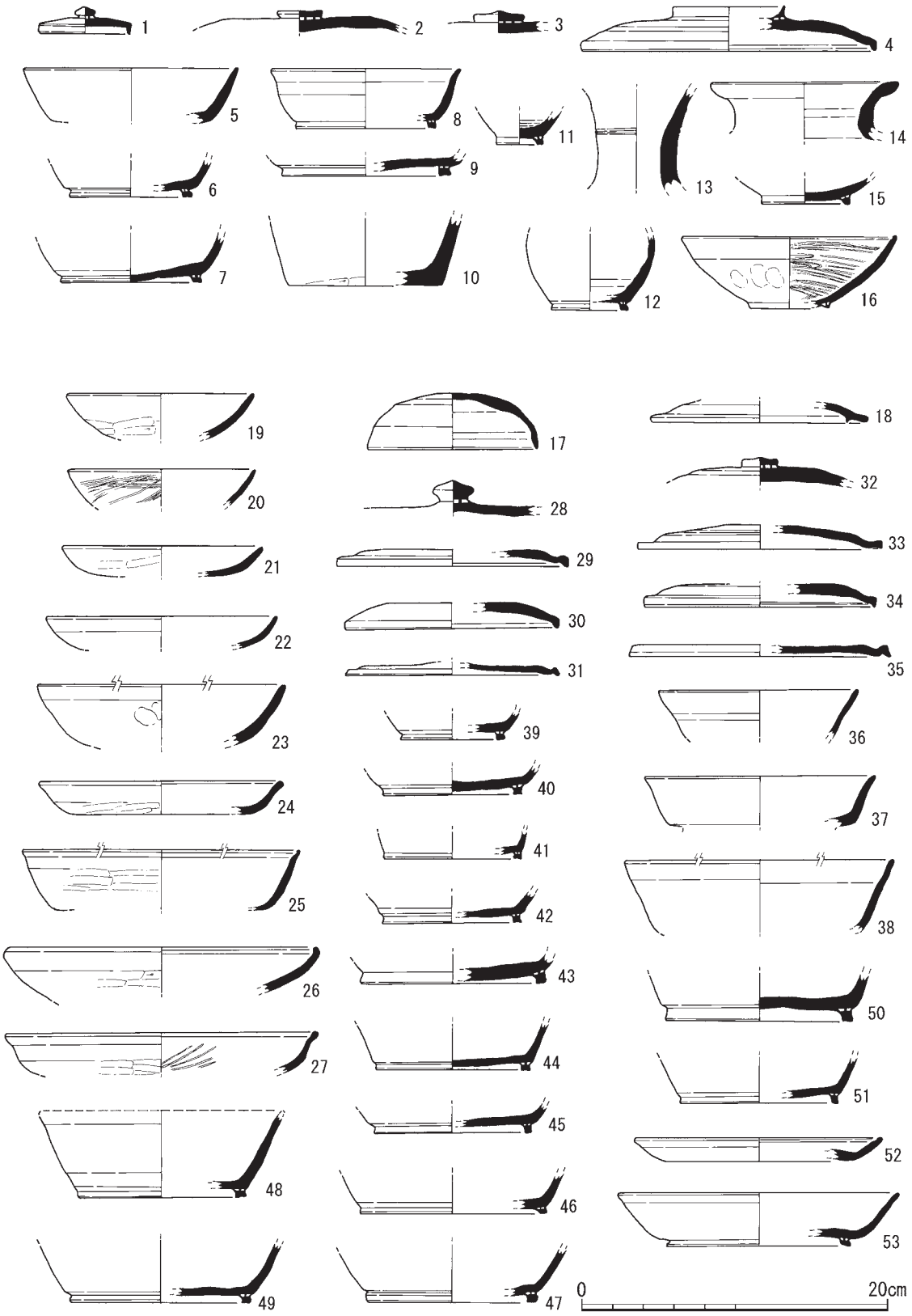
出土遺物は湿地状堆積ＳＸ01の堆積層から出土した遺物を中心として、整理箱にして22箱である。ＳＸ01は西側で４区画に分け、基本的に暗灰色粘質土を上層、黒灰色粘質土を下層、それ以下を最下層として遺物を取り上げた。湿地状堆積層以外は遺構名、土層名を付けて取り上げた。奈良・平安時代の土器は「平城宮発掘調査報告」XIに準じて分類した。

１）ＳＸ01最下層出土の土器

１は上面に自然釉の掛かる須恵器壺Ｅの蓋である。口径5.8cm。２・３は扁平なツマミの付く須恵器杯Ｂの蓋である。４は環状ツマミの付く須恵器の蓋である。口径19cm。５は須恵器杯の口縁部である。口径13.8cm。６～９は須恵器杯Ｂである。７は底径９cm。８は口径12.3cm。９は底径10.8cm。10は須恵器壺の底部と推定される。11は小型の須恵器壺Ｍの底部である。底径2.9cm。12は須恵器壺Ｌの底部である。底径4.9cm。13は須恵器壺Ｌの頸部である。14は須恵器壺の口縁部である。口径12cm。15は無釉陶器の底部である。底径5.8cm。10世紀のものである。16は瓦器椀である。口径13.9cm、器高4.7cm。13世紀前半のものである。出土遺物は奈良時代～長岡京期のものが中心であるが、無釉陶器、瓦器椀がわずかに混入している。

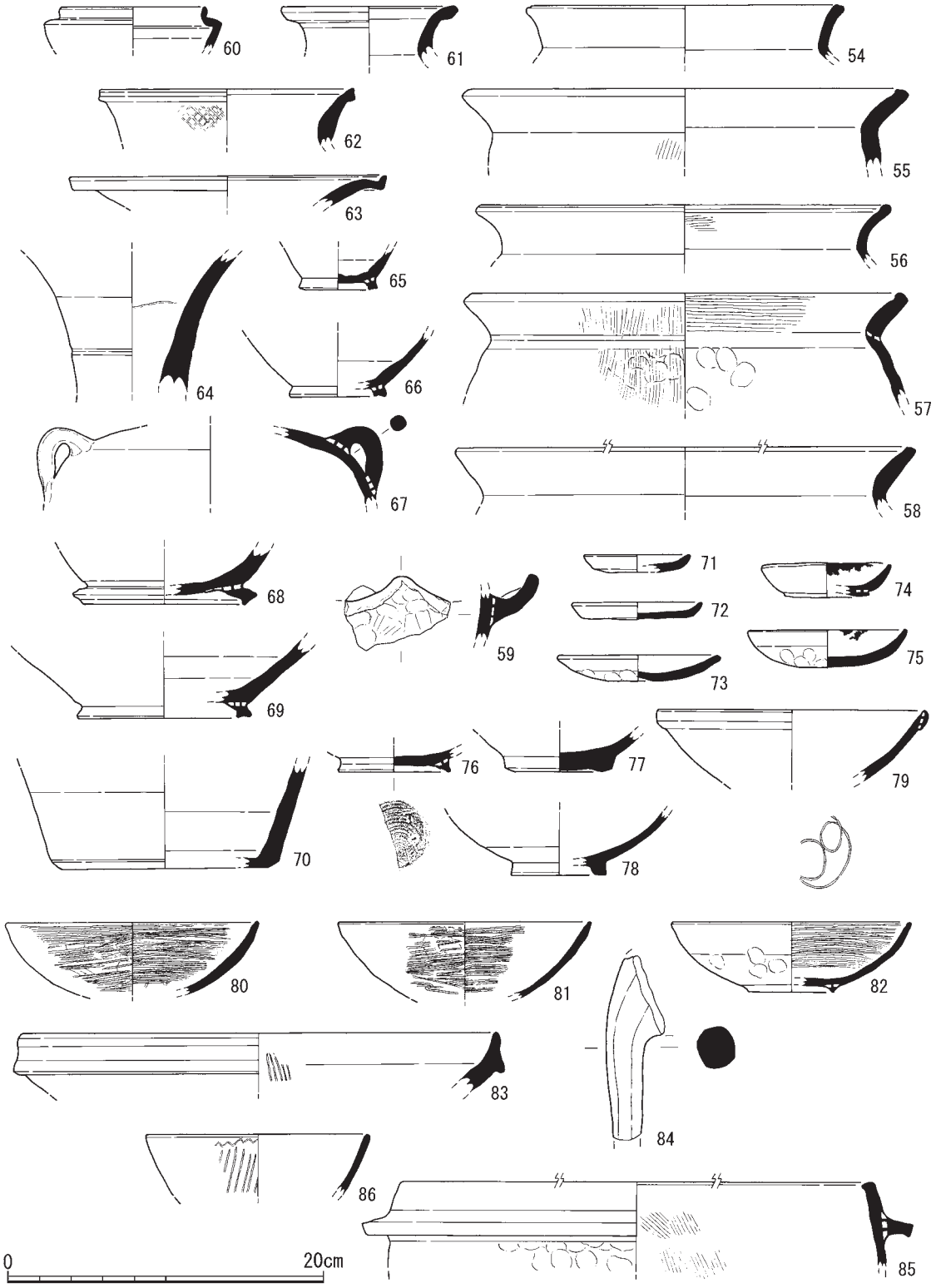
２）ＳＸ01下層出土の土器

17は須恵器蓋で６世紀末～７世紀前半のものである。口径11cm、器高3.65cm。18は須恵器蓋で７世紀前半のものである。口径14cm。19は口縁部外面をヘラ削りした土師器椀である。口径12cm。20は口縁部外面にヘラミガキされた土師器椀である。口径12cm。21･22は土師器皿である。23は土師器椀である。24は土師器皿である。25は土師器杯である。26は土師器皿である。27は口縁部外面にヘラ削り、内面にヘラミガキのある土師器皿である。口径20.5cm。28は須恵器蓋の宝珠ツマミである。32は扁平なツマミの付く須恵器蓋である。29～31､33～35は須恵器蓋である。30は口径13.7cm。35は口径16.8cm。36・37は須恵器杯の口縁部である。36は口径13cm。39～51は須恵器杯Ｂの底部である。42は転用硯である。底径９cm。47は底径10.8cm。52は土師器皿である。53は須恵器皿である。口径18.2cm、器高3.5cm。54～58は土師器甕の口縁部である。59は土師器甕の把手である。60は須恵器壺Ｅの口縁部である。61は須恵器甕の口縁部である。62も須恵器甕の口縁部である。63は須恵器壺Ｌの口縁端部と思われる。64は須恵器壺Ｌの頸部である。65･66は須恵器壺Ｌの底部である。67は須恵器壺Ｎの把手である。68は須恵器壺Ｌの底部である。69は須恵器壺Ｑの底部と思われる。70は須恵器壺の底部である。底径13cm。71～75は土師器皿である。71は口径6.7cm、器高1.1cm。72は口径8.2cm、器高1.1cm。73は口径１cm、器高1.6cm。74は口径８cm、器高2.3cm。75は口径10cm、器高2.4cm。74・75の口縁部に油煙が付くので灯明皿として使用されたものであろう。これらは12世紀後半～13世紀のものである。76は糸切りで高台を貼り付けた緑釉陶器の底部である。底径７cm。内外面に暗緑色に発色した釉薬が掛かる。10世紀前半の近江産のものである。77は内面に灰白色の釉薬が掛かる白磁の底部である。底径



第８図　出土遺物実測図（１）

6.8cm。78も白磁の底部である。底径６cm。79は白磁の口縁部である。口径16.9cm。12世紀のものである。80は口縁端部の内面に沈線が廻り内外面とも密に暗文が施された瓦器椀である。12世



第９図　出土遺物実測図（２）

紀前半のものである。81は口縁端部の内面に浅い沈線が廻り内外面ともに暗文が施された瓦器椀である。12世紀中頃のものである。82は口縁端部の内面に浅い沈線が廻り内面に暗文が施された瓦器椀である。断面が三角形の高台が付く。13世紀前半のものである。83は備前焼と思われるすり鉢口縁部である。16世紀のものである。84は瓦質鍋の支脚である。85は口縁部が内傾した瓦質

羽釜である。86は青磁椀の口縁部である。15世紀後半～16世紀のものである。口径14cm。下層からは古墳時代後期から中世にかけての土器が出土している。

３）ＳＸ01上層出土の土器

87は体部外面にタタキ痕をとどめた第Ｖ様式の弥生土器壺の底部である。88は土師器甕、90は土師器皿の口縁部と思われる。89は須恵器高杯の脚部である。91は土師器杯Ｂである。口縁部外面にヘラミガキを施す。口径19.6cm、器高5.1cm。焼成が良く明茶褐色を呈し、胎土に赤褐色粒を含む。92は土師器高杯の脚部である。外面を七角に面取りしている。胎土に赤褐色粒を含み、焼成が良く、淡赤褐色を呈す。93は土師器甕の口縁部である。94は扁平な宝珠ツマミが付く須恵器杯Ｂの蓋である。95～98は須恵器杯Ｂの蓋である。99は須恵器杯の口縁部である。100～104は須恵器杯Ｂの底部である。105は須恵器壺Ｌの頸部である。106は須恵器壺Ｌの体部下半である。107は須恵器甕の口縁部である。108は肩部に粘土板を貼り付けた須恵器壺の装飾である。109は須恵器壺Lの底部である。110は須恵器壺Ｑの底部である。111～119は土師器皿である。120は台付き土師器皿である。底径6.8cm。12世紀のものである。121は瓦器皿である。口径9.1cm、器高1.4cm。122～126は瓦器椀である。127は東播系の鉢である。128は信楽系の鉢である。129は瓦質の羽釜である。130は瓦質羽釜の脚部である。131は白磁椀の口縁部である。132は青磁椀の口縁部である。133は青磁の皿である。底径４cm。134は青磁椀の口縁部である。135は美濃焼のおろし皿である。口縁上部の内外に透明感のある淡黄緑色の釉薬が掛かる。内面に細い一本引きのすり目を施す。

４）その他の遺物

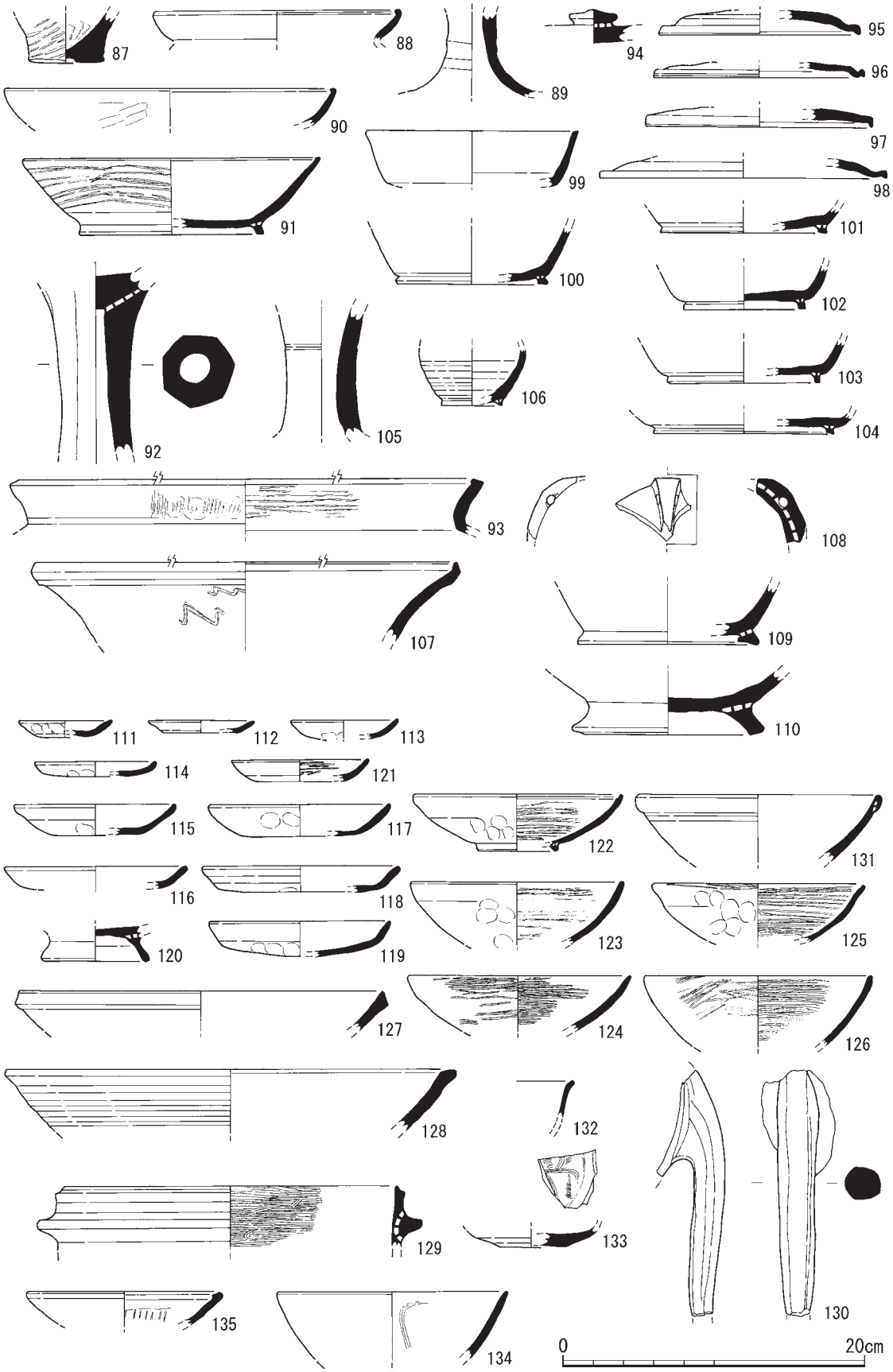
136～138はＳＸ01の１区下層から出土した縄文時代の打製石鏃である。136は小型の凹基無茎の石鏃である。翼の一部を欠損する。重さ0.3g。137も凹基無茎の石鏃である。翼の一部を欠損する。重さ0.5g。138も凹基無茎の石鏃である。翼の一部を欠損する。重さ0.7ｇ。136～138はサヌカイトである。

139～144はＳＸ01の４区上層から出土した輸入銭である。139は開元通寶（初鋳621年）、140は太平通寶（初鋳976年）、141・141は皇宋通寶（初鋳1038年）、143・144は元豊通寶（初鋳1078年）である。

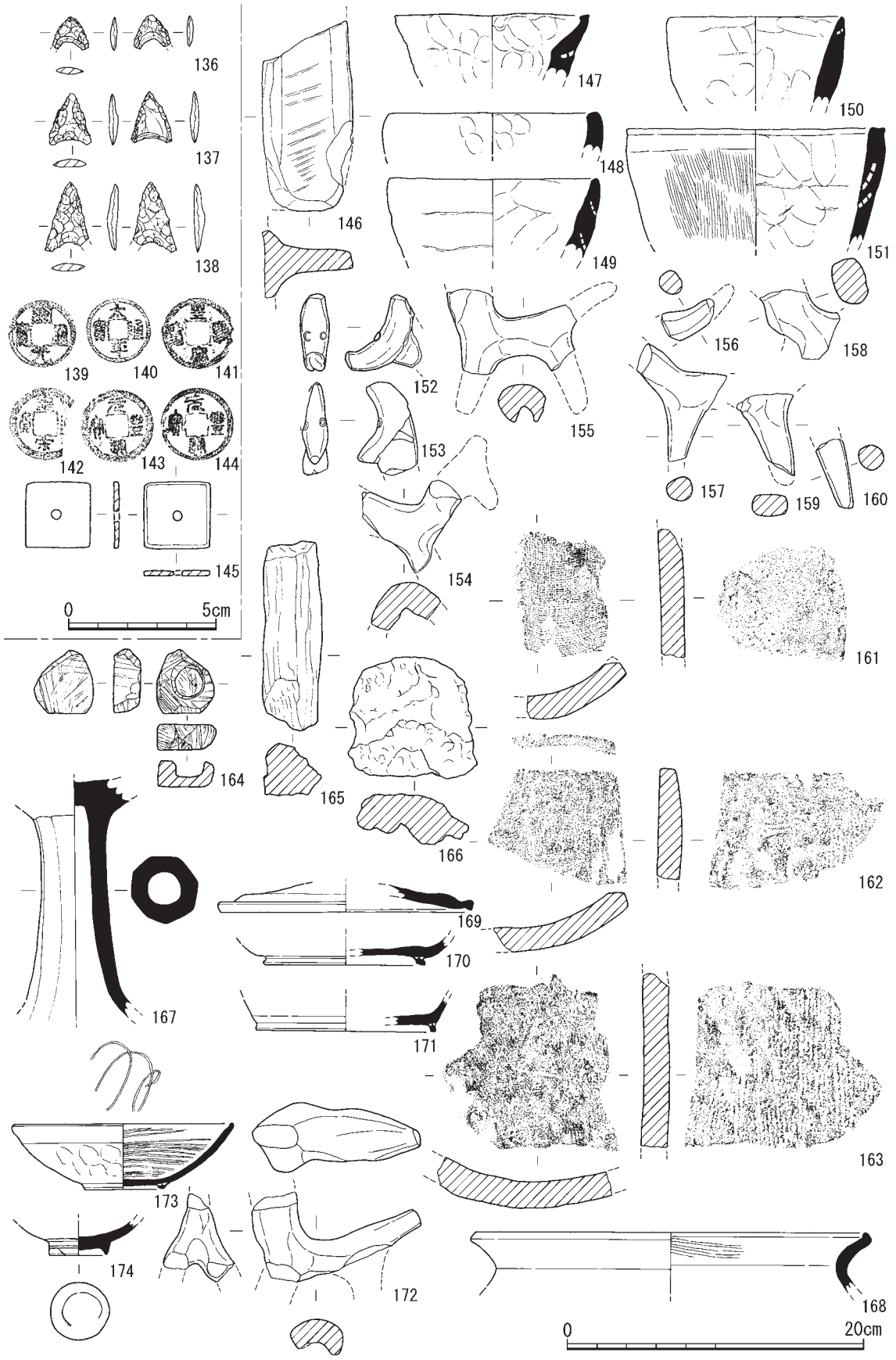
145はＳＸ01の４区下層から出土した鉄製の用途不明品である。2.2×2.25cmの方形で、厚さ0.15cm、中央に直径0.3cmの円形孔を穿つ。

146は南東部の灰褐色土から出土した土師質の移動式カマドの焚き口側面の鍔と思われる。

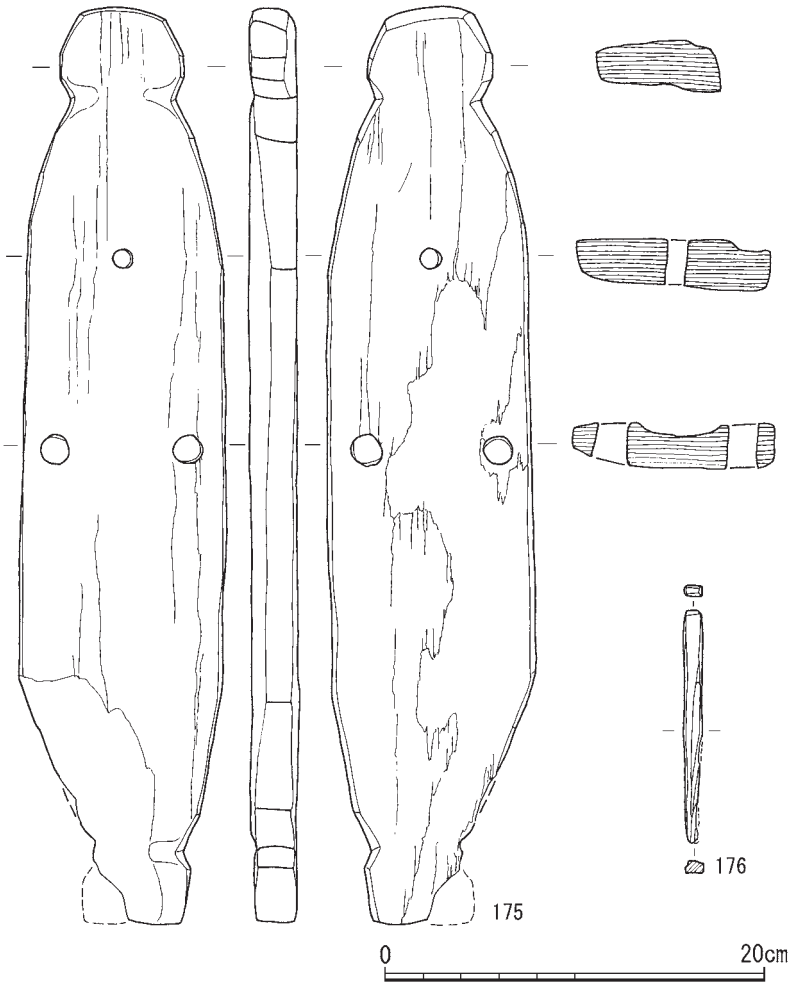
147～151はＳＸ01から出土した二次的な被熱痕跡を有する粗製の土器である。胎土に砂粒が多く含まれ、いわゆる製塩土器である。器体の内外面に成形時の指頭圧痕が顕著に残る。147は口縁部端部を水平に作る。口縁部が開き、細長い器体をもつものである。148はやや内傾する口縁部をもち、器体が砲弾型をなすものである。149・150は口縁端部が尖りぎみで、やや開く口縁部に細長い器体をもつものである。151は147～150のような粗成器ではないが、同様な胎土をもち、被熱している。口縁端部を水平に作り、砲弾型の器体をもつ。体部外面はハケ調整、内面は



第10図　出土遺物実測図（３）



第11図　出土遺物実測図（4）



第12図　出土遺物実測図（５）

成形痕跡が顕著である。

152はＳＸ01の４区下層から、153はＳＸ01の２区上層から出土した土馬の頭部である。154はＳＸ01の４区下層から出土した土馬の胸部である。155はＳＸ01の４区最下層から出土した土馬の体部である。156はＳＸ01の２区下層から出土した土馬の尾である。157はＳＸ01の４区最下層から出土した土馬の後脚部である。158はＳＸ01の４区下層から出土した土馬の胸部である。159はＳＸ01の４区上層から出土した土馬の脚部ある。160はＳＸ01の南部の断ち割りで出土した土馬の脚部である。172は南壁断面の暗灰褐色土（砂礫混入）から出土した土馬の体部である。三日月様の頭部、短縮された体部、短い脚などの特徴は、奈良時代後半から長岡京期（平安時代前期）に一般的に見られるものである。

161～163は凹面に布目、凸面に縄目のある平瓦である。いずれも破損して全体の法量がわかるものはない。162は被熱して暗赤褐色を呈す部分がある。161はＳＸ01の下層から、162・163はＳＸ01の上層から出土した。164はＳＸ01の下層から出土した滑石製品である。個体の一面に底径約２cmの円形窪みを作る。その反対側に油煙が付着し、油煙付着面以外に鑿痕跡がみられる。石鍋の転用品と考えられるが、用途不明である。165は棒状の結晶片岩である。器体の一部に、わずかではあるが研磨痕がある。この製品は三波川変成帯あるいはその近傍から搬入されたものと考えられる。近畿では縄文時代晩期頃にこうした遺物が散見されるが、本資料は遺構に伴うものでないので、その可能性のみ指摘しておく。

166は断面形が椀形をなす滓である。下部および側縁に壁体の一部とみられるものが付着している。鍛冶炉状の炉底に形成された滓と考えられる。別個体の成分分析の結果によると、鍛冶滓の一般的成分とは異なっている。成因は鍛冶以外の冶金的作業によるものという以外はわからない。

167は南東部の灰褐色土から出土した土師器高杯の脚部である。脚の外面を八角に面取りを行う。平安時代前期（９世紀）のものである。168は南東部の灰褐色土から出土した土師器甕の口縁部である。口縁部が「く」字に外反し、口縁端部を上方にツマミ上げる。口径26.2cm。169は南壁沿いの断ち割りで出土した須恵器蓋である。口径16.7cm。170・171はＳＸ01の上面掘削中に出土した須恵器杯Ｂの底部である。170は高台が底端部からやや内側に取り付けられているため、８世紀前半のものと思われる。173は南壁沿いの断ち割りで出土した瓦器椀である。口径14.8cm、器高4.45cm。13世紀前半のものである。174は井戸ＳＥ04から出土した唐津系磁器椀の底部である。底径3.9cm。18世紀のものである。

175はＳＸ01の４区上層から出土した田下駄である。長さ48.3cm、幅10.9cm、厚さ2.5cm。両端を圭頭状に抉り、紐を掛ける様に作り、その場所に紐擦れの跡が残る。全長の中央付近の側面近くに直径1.5cmの円形の孔２か所と、片端の中央に直径１cmの円形の孔を１か所に穿つ。176はＳＸ01の１区下層から出土した、一部に面取り痕跡の残る断面が長方形の板材である。ＳＸ01からは他にも板材等が認められたが加工痕のあるものはなかった。

６．まとめ

今回の調査で長岡京跡に関連した遺構は検出されなかったが、以下のことが判明した。

長岡天神の西側から南東方向に張り出した低丘陵上に、中世に埋没してしまう湿地状堆積を検出した。昭和28年の地形図から湿地状堆積の痕跡を推測することができる。また、現地周辺の地形を観察すると旧地形の痕跡をとどめる場所がわずかに認められる。

埋没した谷（ＳＸ01）の底にあたる砂礫層に人頭大の石が多数みられ、当時はかなりの流れがあったと推定され、奈良時代から長岡京期などの土器が含まれていたことから、谷の周辺には多くの人びとが生活していたと推測される。出土遺物に、水辺の祭祀にしばしば用いられる土馬があることから、周辺で祭祀がおこなわれていたと推定される。

湿地状堆積ＳＸ01は、中世には須恵器・土師器・瓦器・青磁などの土器類、田下駄や自然木を含んだ粘質土が堆積した時期があり、何らかの原因で堰き止められ湿地化していたと推定される。堆積層の花粉分析を実施したところ、木本花粉（モミ属・マツ属など）が多く認められ、イチイ科、クマデ属、ニレ属などを伴うこと、草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、サナエタデ節、ヨモギ属を伴うこと、水湿地性植物を含む分類群が比較的多く伴うことが判明した。抽水植物（水面に葉が出る水生植物）、水生藻類も検出された。こうしたことから、粘質土が堆積した頃は、水湿地性植物が繁茂する湿地のような場所であったと推定される。また、クワ科、アカザ科－ヒユ科等の開けた場所に生育する「人里植物」といった分類も含まれることから、谷沿いの段丘上にも開けた場所があったと推測される。

粘質土などから出土した鉱滓や炉壁は、湿地状堆積ＳＸ01の北部からはほとんど出土せず、中央部から南部での出土量が多い。また、東側に多い傾向があるので、中央付近より南の東側から廃棄された可能性が高い。これらの鉱滓・炉壁３点を理化学分析委託したところ、下記の内容の

報告を得た(要旨のみ)。

調査方法は以下のとおりである。①肉眼観察(遺物の外観の特徴などを観察)、②マクロ組織観察(顕微鏡で断面全体を低倍率で観察・撮影したもの)、③顕微鏡組織観察(鉱滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物調査など)、④ＥＰＭＡ(Electron Probe Micro Analyzer)調査(試料面に真空中で電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を分光後に画像化する。更に標準試料との対比から元素定量値をコンピューター処理してデーター解析を行う)、⑤耐火度調査(主に炉材の性状調査を目的とする。溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態度の温度で表示される)

試料１は４区上層で出土したもので、内面全体と外面表層の一部が熱影響を受けガラス質化した炉壁片である。顕微鏡下で観察すると、内面表層のガラス質滓部分で内部に熱影響を受けた砂粒(無色･有色鉱物)が散在する。耐火度調査は1,300度であった。観察面では金属粒は確認されず、鋳造原料に関する情報は得られなかった。

試料２はＳＸ01南東部の灰褐色土(砂礫混入)から出土したもので、肉眼観察では上面全体に橙色の炉材破片が付着した不定形のガラス質滓が見られ、顕微鏡組織観察では灰褐色結晶のマグネタイト、明白色粒の金属鉄が確認された。ＥＰＭＡでは、ごく微細な灰褐色多角形結晶があり、Ｘ線像をみると鉄・酸素に強い反応が認められ、ガラス質滓の定量分析値は非品質珪酸塩で、かなり鉄分が含まれていた。これらのことから鉄鋳物製作に用いた溶解炉内面が強い熱影響を受け溶融した結果生じたガラス質滓と推定される。

試料３は南壁沿いの断ち割り内から出土した。肉眼観察では内面全体が黒色ガラス化した炉壁片で、内面表層に弱い流動状で細かい気泡が点在する。顕微鏡下では非常に微細な金属鉄粒が多数認められた。Ｘ線像をみると鉄に強い反応がある。定量分析値はすべて金属鉄で、一部燐の高値傾向が確認された。非晶質珪酸で鉄分の固溶は少なく、炉壁粘土に近い成分。内面表層のガラス質中に微細な金属鉄粒が多数溶着することから、鉄鋳物の製作に用いられた溶解炉の破片と推定される。

理化学分析の結果､これらの資料は鉄鋳物の製作に用いられたた可能性が高いことが判明した。現地では遺構は検出されなかったが、近接地に鉄鋳物製作に関連した工房が存在したものと推測される。鉄鋳物製作に関連した鉱滓・炉壁は、共伴する遺物から中世(13世紀以降)のものと推定される。

近世には、谷状地形(ＳＸ01)の湿地状堆積は埋め立てられ、水田などの耕作地として利用されたことがわかった。

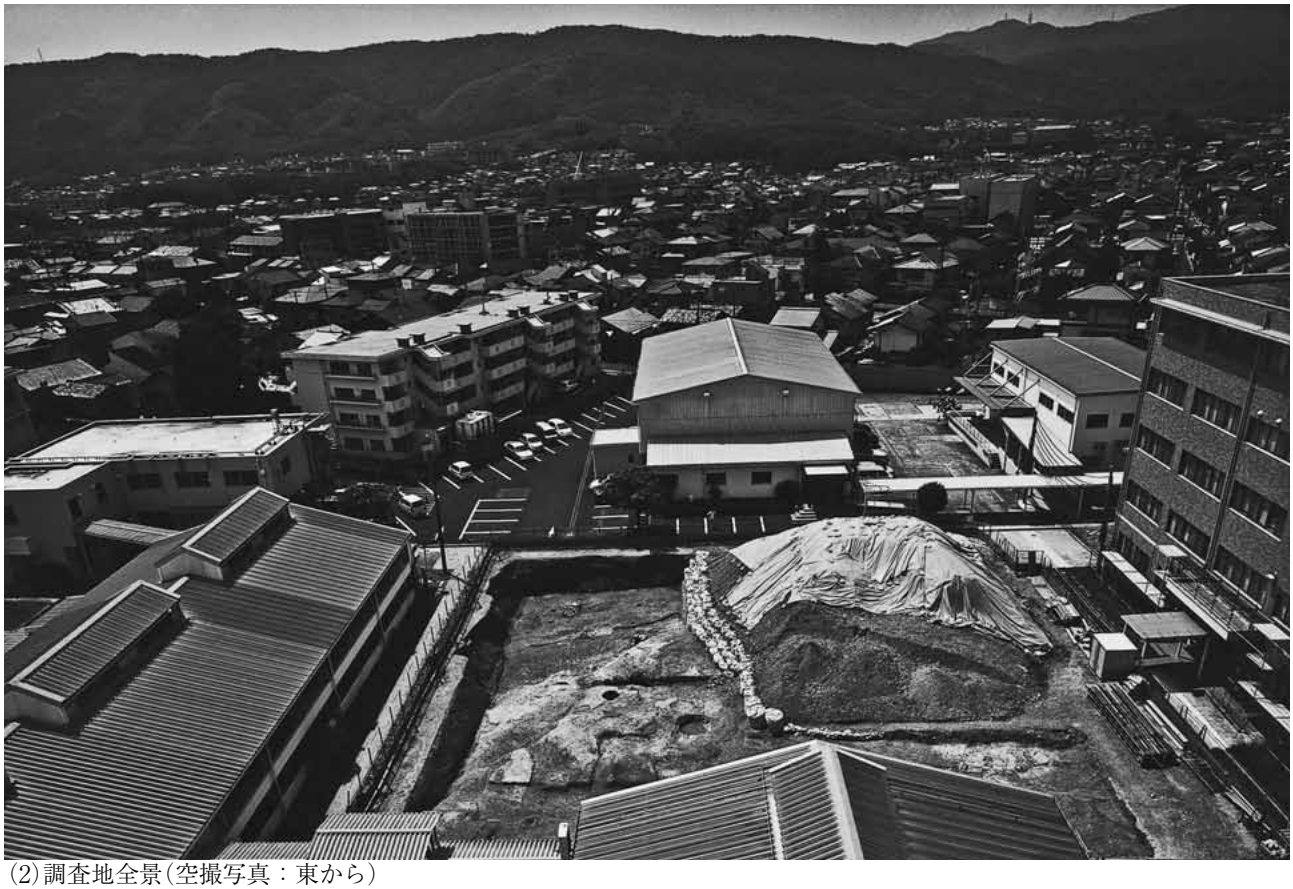
参考文献

小池寛「長岡京跡右京第363次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第43冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

小田桐淳「長岡京跡右京第294次(7ANNKN-3地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和62年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1989

図　　版

(1)調査地全景(空撮写真：北西から)



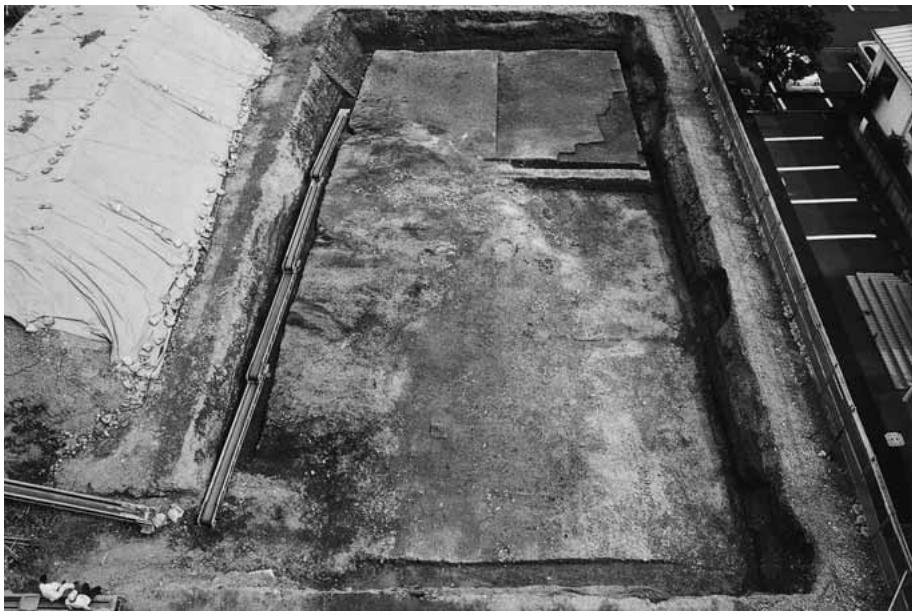
(2)調査地全景(空撮写真：東から)

(1)調査地全景(空撮写真：西北西から)

(2)調査地全景(空撮写真：上が南)

(1)調査前(南西から)

(2)西側トレンチ北部(南から)



(3)西側トレンチ全景(北から)

(1)調査地南部湿地状堆積ＳＸ01
（東から）

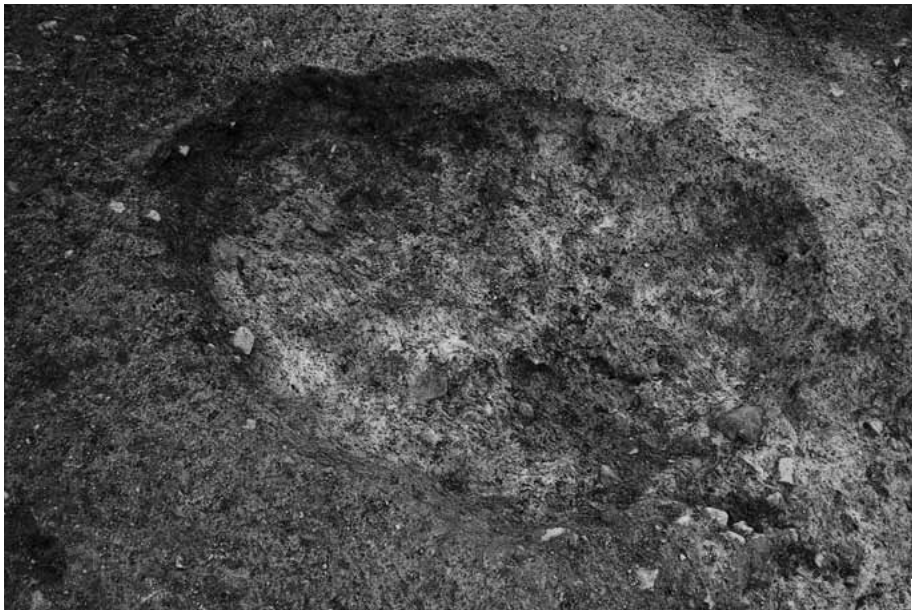
(2)調査地南部湿地状堆積ＳＸ01
（東から）

(3)調査地南部湿地状堆積ＳＸ01
（西から）

(1)西側トレンチ北壁断面

(2)西側トレンチ西壁断面(東から)

(3)南東部南壁断面(北西から)



(1)土坑ＳＫ02完掘状況(東から)

(2)井戸ＳＥ03(東から)

(3)井戸ＳＥ04半割状況(南東から)

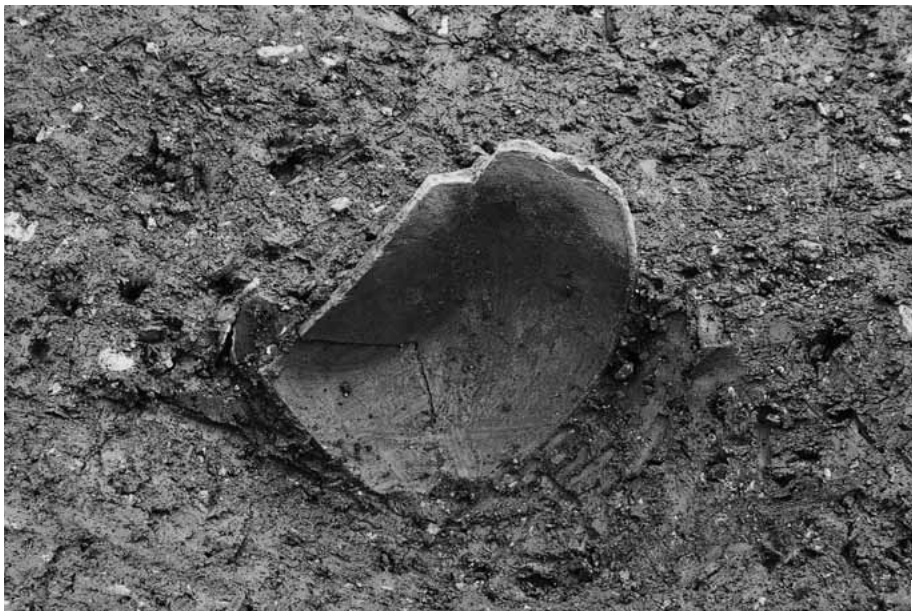
(1)土坑ＳＫ05半割状況(東から)

(2)土坑ＳＫ05、溝ＳＤ07
(南東から)

(3)南部湿地状堆積ＳＸ01
南北アゼ断面(北東から)

(1)湿地状堆積ＳＸ01土器出土状況

(2)南東部土馬出土状況



(3)湿地状堆積ＳＸ01土器出土状況

(1)南部全景(北から)

(2)南部湿地状堆積ＳＸ01掘削状況
(北西から)

(3)湿地状堆積ＳＸ01輸入銭
出土状況

153

153

152

152

155

172

164

164

91

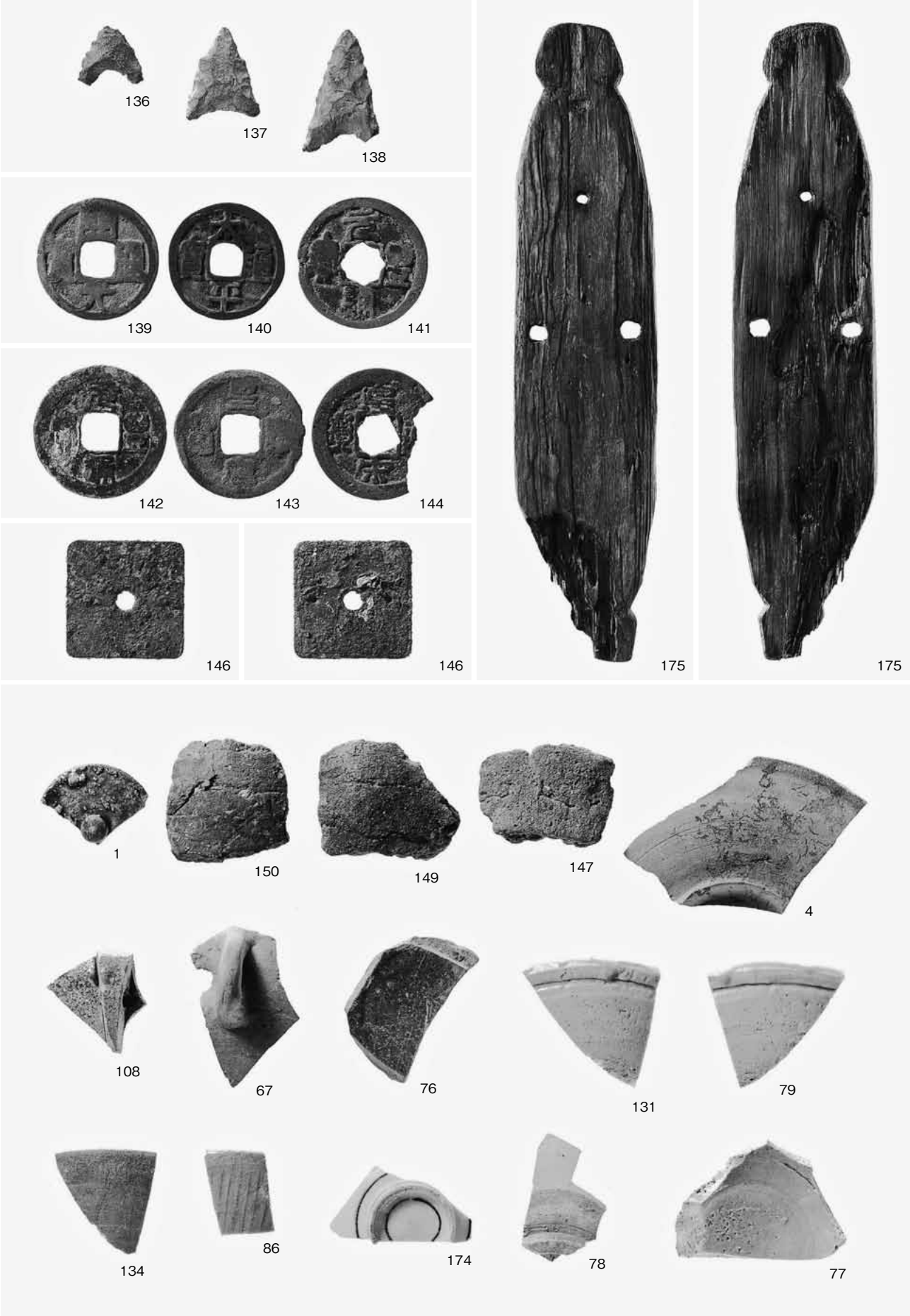
92

13

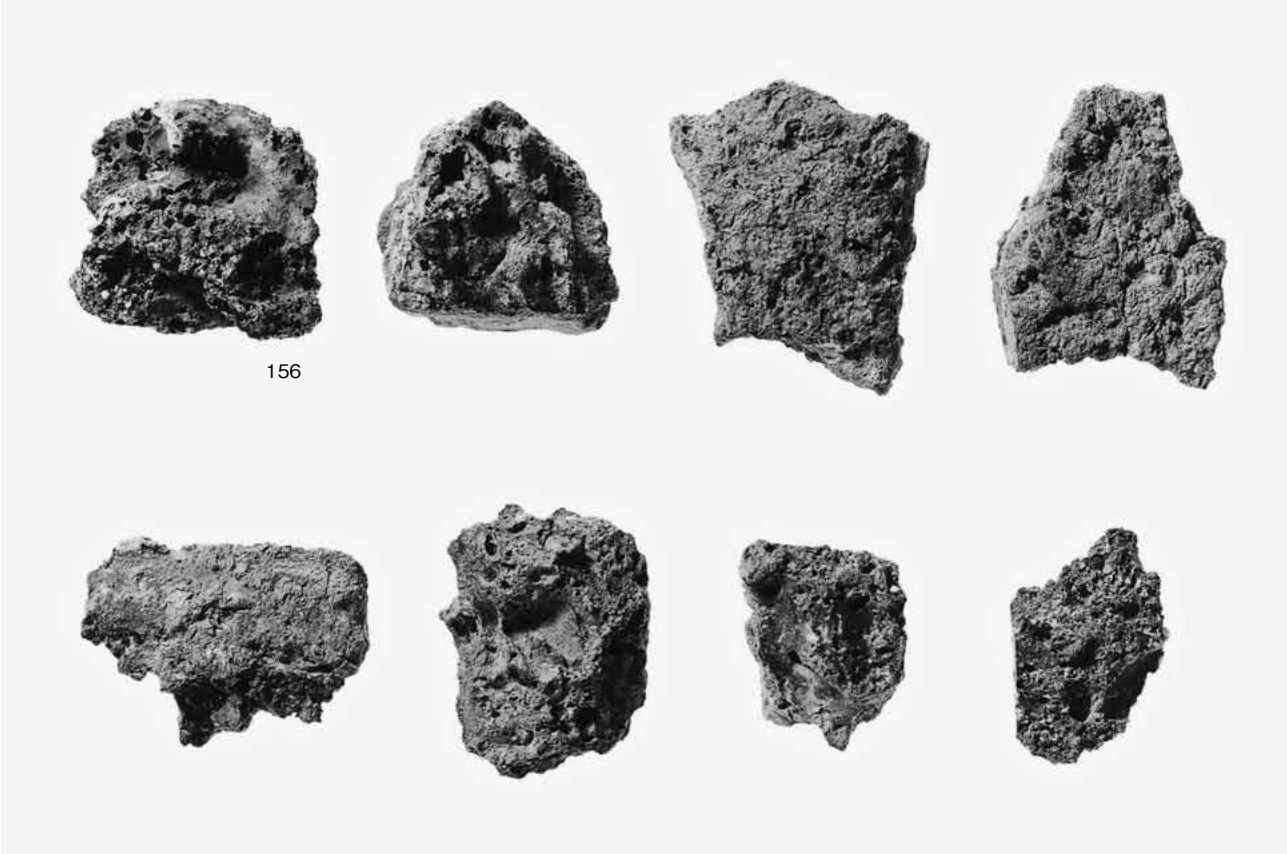
18

75

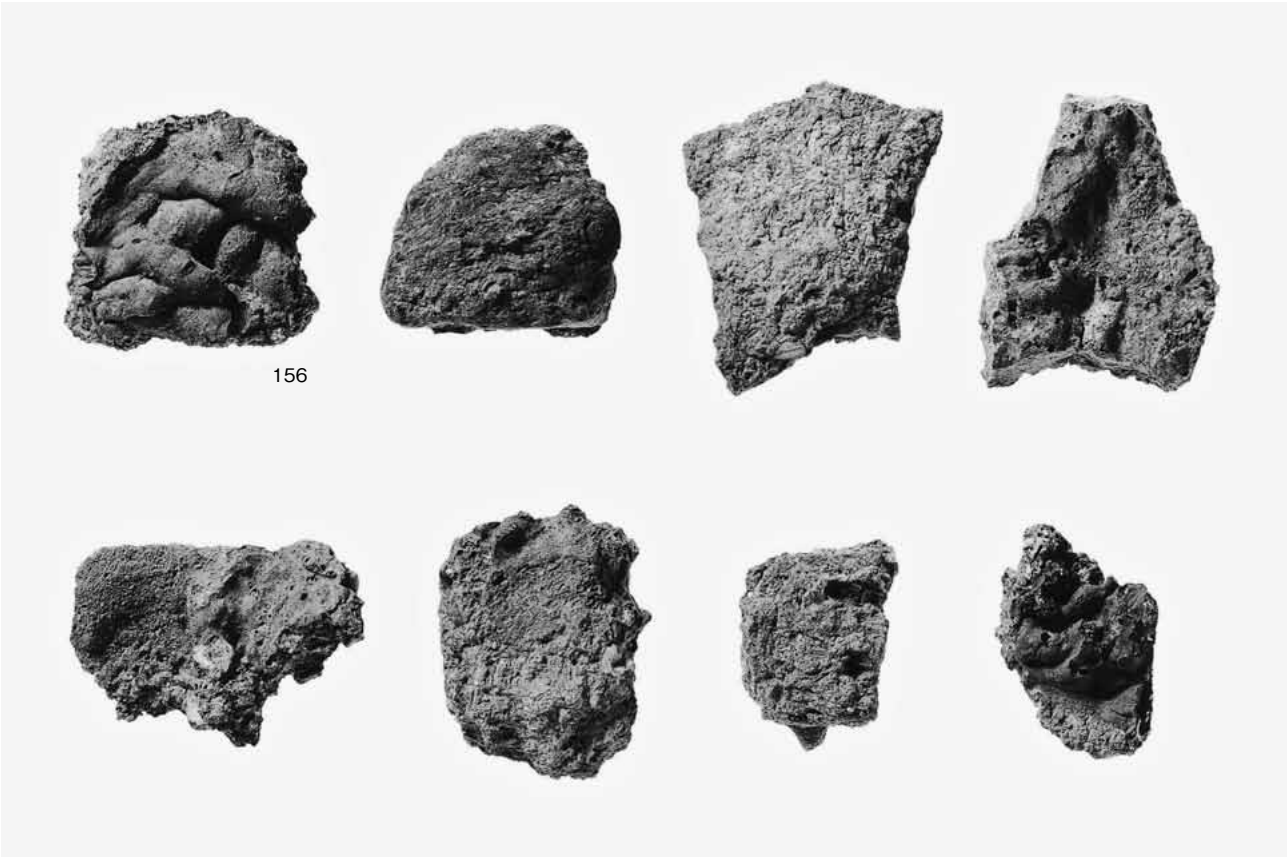
出土遺物 1（番号は実測図に対応）


136
137
138
139
140
141
142
143
144
146
146
175
175
1
150
149
147
4
108
67
76
131
79
134
86
174
78
77

出土遺物２



(1)出土遺物３(鉱滓・炉壁)



(2)出土遺物３　裏面(鉱滓・炉壁)